



★13★

渡辺 大直

代や照来」と答えてしまっている。

豊岡からの帰り道。道を変えて海岸回りで帰ってみようと思い立った。真つ平らな水平線と変化に富んだ崖や岩が雄大で迫力のある景色をつくりだし、所々にあるパーキングエリアに車を止めて眺めると、それぞれに違う表情で楽しませてくれた。

昔からタネウシには生まれた村の名を付ける習慣があった。1919(大正8)年に但馬牛の血統登録が始まり、名前や生年月日、出生地、両親や飼い主の氏名などが記録されているので確認できるようになった。

牛の名前の付け方はさまざま。例えば全国の黒毛和牛の99・9%の祖先として有名な「田尻号」は、生産者の田尻松蔵さんに由来する。このように生産者や父牛の名前にちなんだものや、利用した地域の名前を付けたものもあるが、1940年ごろまでは出生地が名前になっている牛が多い。



牛によく似た形の岩。かつては海沿いの集落でも立派な牛を産出していた

但馬牛もう一つの故郷

以前にも取り上げたが、何頭もタネウシを輩出した村は混乱を避けるため、「城崎」「第二安木」「第三浦上」というように番号付きの名前にして区別した。

但馬牛の故郷としてよく知られる小代や照来のほか、八田や村岡の射添地区ではほとんどこの集落がタネウシの名前になっている。その中には「第二十大谷」「第三十飯野」「第二十岸田」など大きな数字が付いた牛もいて、種牛産

■筆者プロフィール■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

地のブランドネームのようでもある。

地図に昔のタネウシの名前になった集落をマークすると、竹野川流域、佐津川および土生川流域、それに矢田川流域とこれらをつなぐ海岸沿線が城崎系但馬牛の故郷であることが分かる。

そんな城崎系タネウシの中で、「第四相谷」と「第六相谷」は1946年から但馬牛の育種資源として作った「よし蔓」の中心にいた牛だ。現在の種雄牛の中では、エースの丸宮土井、若手の宮喜、宮菊城は彼らの血を引き、但馬牛の多様性を高める。大きな使命を帯び、活躍が期待されている。

今子浦大引きの鼻にある、座って大海を眺める牛に似た岩が「任せとけ」と言ったような気がした。